

パネルディスカッション「当事者の座談会」¹
(2021年度関学レインボーウィーク)

例年、関西学院大学非公認 LGBT サークル CASSIS に所属している現役生によって実施されてきたパネルディスカッション「当事者の座談会」であるが、今年度は現役生に加えて卒業生らにもパネリストとして登壇してもらい、2012年5月19日(水)の20時から22時まで、オンラインにて開催した。現役生1名と卒業生2名がパネラーとして登壇したこのオンラインでのパネルディスカッションには、17名の参加者(内、登壇者3名、関係者3名)があった。

パネルディスカッションでは、登壇者の自己紹介、「セクシュアリティとは何か」をテーマとした短時間の講演、ライフストーリーや学生生活での体験談の共有、質疑応答のあったのち、ブレイクアウトルームにて登壇者と参加者が自由に質問や雑談をする時間が設けられた。事前に質問を募集したところ、カミングアウトに関連する質問が複数寄せられたこともあり、学生生活の体験談はカミングアウトの話題が中心となった。

登壇者のAさん(卒業生)は「トランスジェンダーであり、バイセクシュアル」、Bさん(卒業生)は「トランスジェンダーであり、恋愛感情と性的欲求があまり一致しないセクシュアリティ」、Cさん(現役生)は「Xジェンダー(ノンバイナリー)であり、Aセクシュアル、性的指向はクエスチョニング」である。

セクシュアリティに気づいたきっかけ

ライフストーリーとして、パネラーの3人が自らのセクシュアリティに気づいたきっかけを語った。

¹ 〈動向〉「関西学院における2021年度の多様性尊重に関する取り組み：第9回関学レインボーウィークを中心に」(武田丈, 梶谷優希) pp13-23『関西学院大学 人権研究』第26号(2022年3月発行)の一部を転載

A さんがトランスジェンダーであるという気づきは、幼稚園の劇がきっかけとなった。劇で「男の子」と「女の子」に分けられた際、いつも遊んでいた男の子たちと同じ場所に行こうとすると、先生から「そっち(男の子の列)じゃない」と言われ、自分がセクシュアルマイノリティであることに気づいたと言う。また、中学時代に女の子も好きになったことから、好きになる際に相手の性別は重視しないというセクシュアリティに気づいた。

C さんも同じく幼稚園の劇がきっかけとなっている。キリストの生誕劇をするにあたり、男の子の役とされていた「兵士役」をしようとした際に周囲がざわついたことで自分の割り当てられた性別への違和感に気づいたと言う。なお X ジェンダーというセクシュアリティについて言語化できたのは高校生になってからであった。

B さんは小学生の頃に「おかま」と呼ばれたことがあったが、当時は自分のセクシュアリティには気づいていなかった。小学 4・5 年生になり第 2 次性徴の話聞いたことで「自分は女の子になるの?」と絶望し、セクシュアルマイノリティであることに気づいたと言う。トランスジェンダーというセクシュアリティについて、言語化ができるようになったのは中学生ごろであった。

性的マイノリティに関する情報へのアクセス

在学生と卒業生が登壇したことで、それぞれの学生時代を比較すると情報へのアクセスの手段や容易さに差があることがわかった。

2012 年に本学を卒業した A さんが中学生や高校生の時期にはスマホや SNS が普及しておらず、情報を得ることが難しい環境であった。図書館に同性愛が描かれた小説があり「自分に何か関係があるかも」と思ったが、司書のいるカウンターで借りることも、借りた履歴が残ることも嫌だと感じ、こっそり読んで過ごす中で「同性を好きになる人」がいることを知ったと言う。その後ホームページやブログが流行り、「同性愛」カテゴリーのブログを読んで過ごしていたが、共用のパソコンであったため親に見られることを恐れ、検索ワードや履歴を毎回削除する日々であった。

2020 年に大学院を卒業した B さんは、第 2 次性徴によって自分が

女の子になることに絶望し、第 2 次性徴を止める方法を調べる中で「性同一性障害/トランスジェンダー」という言葉にたどり着いた。高校生時はブログをしており、自分の住む県の人を探して「胸を取るための情報」を集めていた。制服について学校と交渉して嫌な目にあった人や、結果として学校を辞めたというマイナスの情報が載っているブログもあったと言う。直接会うことはなかったものの、ブログを介して情報を集めることができていた。

現在 4 回生の C さんに関しては、C さんが中学生の頃には Twitter (SNS) が流行っており、C さん自身がネットを使い始めた頃には「LGBT+」という言葉が一般に広く知られ始めていた。「性同一性障害」についての話題もテレビで目にするようになっていたため、すぐに検索ワードを入れることもでき、性的マイノリティに関する情報を集めることができた。高校生時はネット上で見つけた LGBT コミュニティに参加もしていたと言う。

わずかな世代間の差にもかかわらず、インターネットの普及度合いや LGBT に関する情報の周知度合いによって、性的マイノリティに関する情報へのアクセスに大きな違いが見られた。

カミングアウトの経験談：A さん

A さんは 20 歳までカミングアウトをせず過ごしてきた。大学入学後、A さんの望む服装や外見で生活することができていたが、就職活動によって「女子」の枠にはめられること、すなわち性別規範を押し付けられることに疲れ、カミングアウトすることを選んだ。「本来思っている自分で生きていくのとどちらが幸せか」を考えた結果であった。カミングアウトした友達たちからは「A は A だね」と受け入れられたが、母親にカミングアウトした当初は「聞かなかったことにする」という対応をされている。「勘当されるかも」と初めは怯えていた A さんだが、4～5 年をかけ、LGBT 関連の本や新聞記事を実家に置いていったり、セクシュアルマイノリティの友人たちとの話を積極的に話すなどを通じて、現在では「家族も理解しようとしてくれるようになった」と感じている。初めのカミングアウトから 10 年が

経った頃、「どう接して良いかわからなかった」と母から打ち明けられたと言う。

Aさんはカミングアウトについて「シスジェンダーやヘテロセクシュアルが当たり前存在として規範化されている中では、カミングアウトするという行為は常に怖くて心配なもの」と表現する。それでもカミングアウトを「関係性を作るためのもの」と捉えるのであれば、同じ人にも何度もカミングアウトし、自分が何に困り、どんな希望があるのかを時間をかけて知ってもらうことも大切だと思う、と説明した。

Bさん

中学生の頃に丸刈りにしていた Bさんは、カミングアウトをしていなかったものの「みんななんとなくセクシュアリティに気づいていたのではないか」と考えている。当時の学校はセクシュアリティ以外のマイノリティの生徒が存在していたため、同質的な環境ではなかったと振り返る。

なお、大学入学時はカミングアウトを全くせず過ごしていた。言語の授業の中で、1人の先生が男性として Bさんを扱い、もう1人の先生が「SHE/HER」といった代名詞を使い女性として Bさんを扱ったため、同じ授業を受けている人たちから「あいつなんだ？」と奇異な眼で見られることとなった。しかしカミングアウトに苦手意識を感じていた Bさんは、そうした出来事があっても周囲にカミングアウトをせずに過ごしていた。

親へのカミングアウトは Bさんが中学生か高校生の頃に行ったが、お互いに大号泣し、その後も Bさんのセクシュアリティをめぐる喧嘩になることがあった。現在、親は「Bさんとうまくいっている」と感じているようだが、Bさんにとってはその時のわだかまりがあるままだと言う。

Cさん

Cさんは、大学生活においては、良い意味でカミングアウトをするメリットが感じられない環境だと感じている。したがって、通称名の使用など、自分の要望を通したい時にだけカミングアウトしている。一番しんどかった思い出として語られたのが、大学1年の頃の親へのカミングアウトであ

る。「女性はレディースを着るもの」という意識が強い母親は、身長の問題もありレディースを着ない C さんへのフラストレーションが溜まり、「言うまで帰らせない」と半暴力的な形で C さんを軟禁した。なお、父親はりゅうちえるがテレビに出た際、「自分の息子がこんなやつたらぶん殴る」と発言していたため、C さんは「絶対にカミングアウトしない」と思っていた。

軟禁を受けた C さんは無理やりカミングアウトをさせられたが、父親は「なんのことかよくわかっていないような反応」で、母親は「すっきりした」というような様子であった。しかし軟禁を受けたことや、その軟禁の時期が C さんの所属する劇団の旗揚げ公演の直前だったこともあり、C さんからすると今後も親と積極的にセクシュアリティについて話したいとは思えない関係だと感じている。こうした記憶があるため、現在は「自分に利がない限りはカミングアウトをしない」と説明した C さんは、「心に傷がつくので、そう言うのは絶対しないでね」と呼びかけた。

A さんの事例では何度でもカミングアウトし続けることで、初めは肯定的でなかった相手から理解を示される可能性があることが示された一方で、B さん、C さんの事例からは、カミングアウトを受けた側が清算できている「過去のカミングアウトへの対応」が、本人にとっては何年経ったとしても不信や不満といった「わだかまり」や「心の傷」として残り、自ら話したいという気持ちを奪っている可能性のあることが示された。

学生生活のセクシュアリティにまつわる思い出

中学生や高校生の時期に SNS がなく、情報を得ることが難しかった A さんは、制服に関する要望を学校に出せるとは知らず、「履かないと仕方ない」と思い渋々スカートを履いて過ごしていた。また、胸が出てくることを嫌だと感じ、筋肉をつけるために運動が苦手だが運動部に入っていたと言う。「今もし中高時代に戻れたら文化部したい。性別を気にせず部活をしたかったよ～」と A さんは語った。

B さんの中学校ではセーラー服とブレザーを選べたためスラックスが制服の選択肢にあったが、時代によってどちらの制服を着るかといった流

行があり、Bさんの時代はみんながセーラー服であったため、Bさんも親から言われてセーラー服を着ていた。Bさんは「選択肢があっても選べないことがある」と語る。また、丸刈りにして過ごしていたことから登下校時に小学生から「あの人、男？女？どっち？！」などと言われ、学校への行き帰りだけでストレスがたまる生活であった。大学では、体育の授業を選んだため体力測定を女子として測ったり、トイレで服を着替えたりする生活をしてきた。

Cさんはなんとなく服装について違和感を覚え始めた高校時代が私服で過ごせる学校であり、体操服も学年別に別れているだけで、服装に関して性別で分けられることがなかったためのびのびと生活できていたと言う。セクシュアリティに関して同じような境遇の生徒が存在し、その生徒が先生にトイレのことなどを相談しているのを見聞きしていた。大学に入ってから恋愛の話ばかりする周囲の環境に馴染めず、カウンセリングを受けたことで当事者サークルにつながったと言う。

参加者へのメッセージ

参加者からの質問への答えや参加者へのメッセージとして、カミングアウトを受ける側へのメッセージや他大学への思いが話された。

カミングアウトについての質問への回答として、カミングアウトの意向やカミングアウトするタイミングは人それぞれであることから、「カミングアウトされないからといって友だちでないというわけではない」ことが説明された。また、カミングアウトをされた場合、「偏見はないよ」、「理解があるよ」と口で言うだけではなく、その人と本当に友達になりたいのであれば、気持ちよく一緒に過ごしていくために「知っておく必要のあること」を知っていくための努力が必要であるという意見があった。

参加者や他大学へのメッセージとして、「関学がもっとよくなったらいいなと思う」と語られた一方で、「関学だけじゃなく他の大学もいろんな取り組みをしてほしい」と言う声が聞かれた。これは「レインボーウィークがあるから、CASSISがあるから関学を選ぶ」と言うのも本当はおかしいのではないかという指摘であり、「どこの大学でも安心して過ごせるような環

境になってほしい」というメッセージであった。